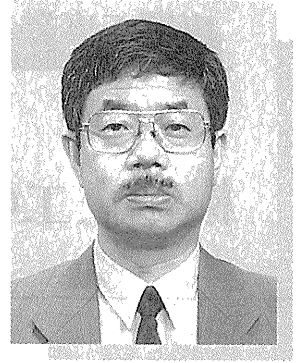


## 巻頭言

# 建設機械リースレンタル業の 役割と課題



一 瀬 益 夫

### 企業による専有からサービスの購入へ

革命的な技術や、新しい機械設備等の普及の歴史を振り返ると、最初は少数の先進的な企業が、これらを専有する形で導入する場合が一般的である。この段階では、それらの標準化や規格化はなされておらず、多様なものが併存する。その後、それらが普及し、急速に発達するにつれて、規格化や標準化が進み、市場価格も急速に低下する。その結果、後発企業は、より進んだ機械や設備をより安価に導入することが可能になる。更に時間が経過すると、それら機械設備のリースレンタルを行う企業が登場し、ユーザー企業は、必要な機械のレンタルサービスを必要な期間だけ購入することが可能になる。こうした推移は、古くは鉄道輸送や電力供給等の領域で当てはまるし、最近では、アウトソーシングやアプリケーションサービスプロバイダーの活用等、情報システムの領域で顕著である。

### 建設機械のレンタル依存の拡大傾向

我が国での機械施工への取り組みは、国を中心に始まったが、その後、機械施工技術や、建設機械の性能の向上と多様化、低価格化等が急速に進み、民間企業による建設機械所有が一般化した。そして最近では、建設機械の分野でも上述の歴史的な必然性に従って、建設機械をレンタルで調達するケースが増加し、今日では、建設機械のレンタル依存度は50%を超えていると思われる。

本年度から国が発注する工事のほぼ半分について、ユニットプライス制の導入が開始されたが、この方式では、建設機械経費は、受注者（元請企業）と発注者が契約する総価に埋没していくために、入札する企業の専有建設機械の実質コストが業界平均よりも高い場合には不利になる。この結果、機械の稼働率等から考えて、大部分の建設業者にとって、機械を所有することは困難になり、レンタル依存は更に進むと思われる。

### レンタル依存にともなう建設業者側の問題

建設業者が建設機械の保有をやめると、早晩、建設

機械に関するノウハウや、機械施工の技術的な動向を追跡していける人材が枯渇する危険性が考えられる。機械施工をベースとする工法や建設機械は日進月歩で進化していくために、将来は適切な工法や機械の選択や使用法等に関して、建設業者はリースレンタル業者からの提案や指導に依存せざるを得なくなるであろう。こうした事態は情報システムの開発から運用、保守の全てをアウトソーシングした企業においては、既に顕在化しつつある問題である。果たしてこのような状況は、土木・建設業にとって健全なことであろうか。社内での機械施工の技術・技能の維持について、今後十分な配慮が必要となろう。

### リースレンタル業界の構造改善の必要性

以上をまとめると、建設機械リースレンタル業界は今後、いつでも、必要な機械を、適切に維持管理された状態で、しかも合理的な価格で建設業者に提供することが要求されよう。また、個別の工事に最も適した機種や組み合わせを提案したり、建設機械の利用実態やユーザーからの不満等に関する情報を収集、分析することにより、建設機械メーカーに新製品開発や改良について助言したりする役割も果たさなければならなくなる。

ところが、建設機械リースレンタル業は、多数の小規模企業によって構成されており、しかも建設需要が長期間低迷する中、価格競争を中心とした過当競争の状態が長く続いていて、こうした社会的な使命を果たす余力がないように思われる。建設機械リースレンタル業者は、統合や合併を進めて適正な企業規模を確保したり、整備工場を数社で共同利用する等、一層の構造改善を図ることが課題である。また、建設業者も、取引業者の選択に際して、価格のみに注目するのではなく、トータルでのサービスの質を重視することで、建設機械リースレンタル業の健全な発展に資する必要がある。